

女神なんてお断りですつ。
5

登場人物 紹介

フラム

ティアと誓約している
ドラゴンの子ども。
甘えん坊な性格。



エルヴァスト

第二王子。
ベリアローズの友人で、
ティアを本当の妹のように
可愛がっている。

ベリアローズ

ティアの兄。
ティアの特訓で女嫌いを
克服した。学園の高学部に
通っている。

カグヤ

学園の教師。
魔術学を担当している。
一見きれいな男性だけれど、
その正体は——？

ルクス

ティアの専属護衛。
過保護で苦勞的な性格。
ティアへの恋心を自覚して
以来、周囲から生温かく
見守られている。

ティア

10歳の伯爵令嬢。
前世で革命を起こしてせくなり、
同じ世界に転生した。
神から授かった「女神の力」を
フル活用し、二度目の人生を
楽しんでいる。

アデル

竜人族の血を引く少女。
その血が原因で周囲から
差別を受けてきた。

キルシュ

侯爵家の三男。
自分より成績の良い
ティアをライバル視
している。

マティ

伝説の魔獣ディストレアの
子ども。普段は体のサイズと
毛色を変えている。



目次

第一章	女神の新たな門出	7
第二章	女神の新しい友人	49
第三章	女神は笑みを望む	87
第四章	女神は <small>ほんろう</small> 翻弄する	151
第五章	女神が提案する未来	179
第六章	女神と自慢のメイド	228
終章	女神の約束の場所	269

第一章 女神の新たな門出

夜の闇の中。二人の少年は、急ぎ学園の寮へ向かっていた。

明日から新学期が始まる。今日は高学部への進学を祝い、気心の知れた友人達と集まっていたのだ。休暇中なので門限はないが、つい時間が経つのも忘れて遅くなってしまった。

「そろそろ迎えに来ようとしているだろうな」

「ああ」

寮に残してきた従者達が心配しているだろう。ここは一刻も早く帰らなくてはと、片方の少年が前方を指差す。

「あのパン屋の横の道が近道のはずだ」

「少し暗いな。けど、今は時間との勝負だからな。これ以上遅くなると、父上に報告が行きかねない」

「ああ。走れば大丈夫だろう」

そうして彼らは、大通りから外れた路地へ入り込んだ。その道を通ればショートカットでき、時間的大幅に短縮される。

しかし、少年達は気付いていなかった。彼らをつけている者達の存在に。

この街には学園があるので、貴族の子息子女が多い。しかし、護衛もなく夜に出歩く者はまれだ。つまり少年達は、金に困った者達には格好の獲物だった。

三人の怪しげな男達が背後に迫る。そのうちの二人が、それぞれ少年達の肩を無遠慮に叩いた。「わっ！」

「だっ、誰だ!？」

少年達は驚いて立ち止まる。振り返れば、ニヤニヤ笑う男達と目が合った。

その卑しい笑みを見て、少年達は顔を強張らせる。肩に置かれた手を振り払う事もできないほど、足がすくんでしまっていた。

「兄ちゃん達い。こんな時間に危ねえなあ」

「不用心だぞ」

「よしっ、おっちゃん達が寮まで送ってやるよ」

ただの親切な人ではないと、世間知らずな少年達でも分かる。

「い、いえ……っ」

「結構です……」

緊張と恐怖で濁っていく喉から、なんとか声を絞り出す。しかし、男達にはそんな少年達の言葉など関係ない。

「あっはっはっ、そんな緊張すんなって。大丈夫。おっちゃん達についてくればいいんだ」

男達は互いに一度目を合わせると、肩に手を置いていた二人が、少年達を強引に捕まえる。

「あっ、や、やめっ」

「た、助けてっ!!」

勝ち誇ったような笑みを浮かべる男達。騒がれては面倒だと思ったのだろう。手の空いている男が少年達の腹を一発ずつ殴った。

「うっ」

「ぐっ」

気絶して崩れる少年達を抱えようと、男達が腕に力を入れる。

その時だった。

コツン、コツンと足音が響いてきて、男達は反射的に振り返る。すると次の瞬間、何者かが一気に距離を詰めてきた。

それは人ではあり得ない速度で、男達にはその姿を視認する余裕もなかった。

これでもかというほど目を見開く男達。そのうちの一人が倒れ、そちらに目を向けようとしたもう一人も倒れる。

残された一人が、咄嗟に頭をよぎった言葉を口にした。

「銀のガードイアンっ……っ」

そして、最後の一人が地面に沈む。

それを見下ろす冷徹な瞳と長い銀髪が、暗い路地に射し込む月の光を反射していた。



「ティア。そろそろ起きる時間だよ」
「ううん……」

キングサイズのベッドに寝ている少女。緩くウェーブのかかった茶色の髪は、ここ三年の間に胸元近くまで伸びていた。

少女の名前はティアラール・ヒュースリー。周りからはティアと呼ばれている。フリーデル王国の一領主である、ヒュースリー伯爵の娘だ。彼女が目覚ませば、快活に輝く茶色の瞳が見えるだろう。

そんなティアを、ベッドの端に腰かけている麗人が、クスクスと笑いながら呼び起こす。

「ふふ、可愛い寝顔だけど、今日は入学式ではなかったかい？ 早く起きないと遅れるよ。あ、でも、お姫様を天馬で学園へ送るというのも素敵かもしれないね」

「入学式……」

寝ぼけた頭の中で、黒い天馬に乗って学園に降り立つ自分と、美しい魔王様の姿が見えた。そして、騒然とする学園の風景……

「つうわああっ！」

ティアは慌てて飛び起き、現状を確認する。夢と現実の境目が曖昧でドキドキが止まらない。

広いベッドの上でキョロキョロと部屋を見回す。一国の王の寝室らしい上品な部屋だ。

ここがどこだか理解したところで、甘く微笑む麗人と目が合った。

「ふふ、おはよう。可愛いお姫様」

「あ……お、おはようカル姐……」

ティアがカル姐と呼ぶのは、前世からの友人である魔族の王だ。名はカルツォーネ・レディレイス。本当は魔王としての長つたらしい名前もあるそうのだが、それは教えられていない。

男も女も虜にしてしまう天然タラシ。そんなカルツォーネが世にも珍しい黒い天馬に乗って現れれば、学園は大騒ぎになるだろう。

夢で良かったと胸を撫で下ろすティア。だが、カーテンの隙間から射し込む朝日に気付き、先ほどの夢が現実になりかねないと焦る。

「お、起きなきゃっ。着替え替えっ！」

「ここにあるよ。そんなに焦らなくても大丈夫。入学式は昼からなんだろう？」

「うん。そうなんだけどね」

差し出された着替えは、真新しい制服だ。今年十歳になるティアは今日、国立フェルマー学園の小学部に入学する。

髪だけでなく身長も伸び、顔つきも少し大人びた。澄ました令嬢を装えば、誰もが振り向かずにはいられないだろう。

「先に寮の方へ、荷物の確認に行かなきゃならないの。お兄様達が待つてははずだから」

「そうか。だが、朝食はキチンと食べよう」
「はあい」

ティアは今日までの三日間、この魔族の国で過ごした。七歳の時に再会してから、もうすぐ三年。カルツォーネに会いに、幾度となくこの国を訪れている。最初の頃は日帰りで保護者付きだったのだが、この一年でようやく一人での宿泊も許されたのだ。

着替えをしながら、ふと前世の事を思い出す。

バトラー王国の第四王女、サティア・ミア・バトラー。それが前世での立場と名前だ。圧政を敷いた王家を自らの手で滅ぼし、十五歳で命を落とした。それはサティアにとって苦悩の末の決断であり、善行をしたつもりはない。

しかし、サティアは民を救った『断罪の女神』と崇められ、この時代に女神として転生する事になった。前世では諦めた冒険者になるといふ夢を叶え、今を楽しんでいる。

神からは、また世界を平和に導いてほしいなどと言われているが、自分や周りの人々に関係がない以上、それを聞いてやるつもりはなかった。

寝室の隣にある部屋へ移動し、朝食の席につく。テーブルには、バランス良く考えられたメニューが並んでいる。ティアは中央に置かれた籠からパンを取り、幸せそうに頬張った。

「私も行きたいな」

「え……」

カルツォーネの言葉に、思わず顔を引きつらせるティア。目の前に座るカルツォーネは、片肘を突いて紅茶を飲みながら微笑んでいた。

「だって、入学式なんて君がよりいつそう輝く瞬間じゃないか」

前世で友人だったカルツォーネは、再びティアに会えた事が嬉しくてたまらないらしい。再会から三年が経とうとしている今でも、必要以上に構ってくる。ティアも自分勝手なやり方で人生を終えて別れも告げなかった事に引け目を感じており、邪険にできずにいた。

「そ、そんな顔してもダメだよ!? そう言われると思っただから、ちゃんと制服姿を見せに来たんじゃん」

たとえ魔王だと気付かれなくても、カルツォーネが目立つ事には変わりはない。保護者席などに座られて、知り合いだと思われたら大変だ。いや、それ以前に会場が騒然となり、式の進行に支障をきたすだろう。

「その制服、とても素敵だよ。良く似合っている。けれど、それとこれとは別だろう。大人しくしていてもダメかい?」

「ダメ」

仕方ないなど、カルツォーネは肩をすくめる。その後、クスクスと笑いながら、そういえばと尋ねた。「シエリーは行くって言わなかったのかい? 朝の通信は随分あっさり終わっていたけど」

二人がシエリーと呼ぶのは、共通の友人であるシエリス・フィスマ。ハイエルフである彼は、まだ八歳だったサティアに求婚し、彼女が死した後はエルフの里の長を務めていた。

ある時、そこにある世界樹と呼ばれる大樹から、サティアが生まれ変わる事を知らされる。里を飛び出した彼は、人族の国で冒険者ギルドのマスターとなり、五百年以上もの間サティアを待っていたのだ。

その生まれ変わりであるティアへの執着は、日増しに強くなっている。ティアが開発した通信具『伝話心具』を使い、一日三回の通信を欠かさず行うほどだ。

「行くって言われたよ……。一ヶ月も前から押し問答して、最終的に『半日デート権』で黙らせた」

「半日？ そんな中途半端な感じで、よく落ち着いたね」

「そこは呑んでもらったの。『一日デート権』にしたら、シエリーの事だもん。一分一秒まで無駄なく、きつかり丸一日拘束されるのが目に見えてるでしょ？」

「あゝ……うん。なるだろうね……」

二人揃って溜め息をついてしまうのは、それだけシエリスを理解しているからだ。認識としては『困った友人』で一致していた。

「じゃあ、また来るね」

「ああ、気を付けて」

朝の喧騒が城下町から聞こえてくる頃、ティアは城の門の外にいた。傍にはマティという名の赤い狼がいる。最強の神獣とも言われる魔獣ディストレアの子どもだ。

「このローブ、ありがとう」

ティアが身につけているローブは、出がけにカルツォーネから贈られたもの。濃紺の生地で作られており、下の方には白い大輪の花が描かれている。

冒険者として活動する時は、邪魔にならないよう後ろで小さく結んでいる髪。それを今は、令嬢仕様のハーファップにしていた。それがまた可愛らしいローブと制服に、とても良く似合っている。

「ふふ、それを着る度に、私を思い出してほしいな」

「うんうん。大丈夫。カル姐の事を忘れたりしないし」

「ああ、それと学園でいじめられたりしたら、ちゃんと言うんだよ」

「わ、分かった。……そっかあ。そういう事もあり得るんだもんね。気を付けないと……」

「そうだよ。相手をうつかり大怪我させてはいけないからね。気を付けないとダメだ」

「了解」

ティアがいじめに屈する事はない。だが、逆に相手を半殺しにしかねないので、それが一番不安だった。

こうして、少しの不安とたくさんの期待を胸に、ティアはマティに乗って駆け出した。

フェルマー学園のある街は、各種の学び舎が集まり発展した街だ。騎士を育てるための騎士学校、魔術師の育成を目的とした魔術学校、普通の民が学ぶ民間学校などがある。

『学園街』と呼ばれる一つの街だが、行政上は王都の中に含まれていた。王都は北にあり、馬車で一時間ほどかかる。国が街全体の警備をしてくれていて、かなり安全な場所と言えた。

街の外門が見えると、ティアはマティの背から降りる。

魔獣ディストレアは伝説級の存在だ。本来、人がいる場所に現れる事はない。誰もが子どもの頃に『出会ったら逃げろ』と教わる。そんなディストレアに、街中を歩かせるわけにはいかない。

ティアは神属性の魔術を使い、マティを子犬サイズにする。特徴的な赤い体毛は、いつもなら黒く変えているが、今回は白にした。これからマティは、ティアと一緒に寮に住むのだ。

学園の生徒は貴族の子どもが多いため、メイドや従者だけでなく、馬なども入寮を許可される。

マティの体毛を白にしたのは、清潔感を持たせて印象を良くするためだ。

「よし、これなら部屋に入れられるかも。フラムは荷物と一緒に先に行ってるから」

《荷物？ あ、そういえば置物になる練習してた》

ディストレアは人の言葉を解する。こうして会話する事も容易いのだ。

ちなみにフラムとは、ティアと誓約したドラゴンの子どもだ。親を密漁者達に殺されてしまった

フラムは甘えん坊で、ティアと離れるのは嫌だと学園にもついてくる事になった。

フラムの主はティアなので、その傍にいられないのはストレスになる。そう教えてくれた家令リジットの助言により、フラムの『置物大作戦』が発動したのだ。

ドラゴンは魔族が保護している。その子どもが人の国にいて、それも少女が飼っているというのは外聞が良くない。そんな事情もあり、置物になる特訓のために別行動していたのである。

「お兄様が荷物と一緒に受け取ってくれてるはずだから、大丈夫だと思うけど……急いだ方がいいかな」

《お腹空いたら、グウって鳴っちゃうもんね》

「そうだった！ 急ごっ」

フラムのお腹から音がしたら、置物でないとバレてしまう。何より、空腹を我慢できない子どもなのだ。ティアは慌てて街中へと駆け出した。

フェルマー学園には、兄のベリアローズが通い出した時から何度も訪れている。ただし、正門から入った事は一度もない。

《今日は門から入るの？ あっちからの方が近いよ？》

「でもダメ。今日は堂々とね」

マティが示したのは、学生寮に近い外壁だ。いつもはそこを乗り越えて侵入している。急いでいるので心を惹かれないでもないが、ここは我慢と鉄製の大きな門をくぐった。

「あれ？」

《どうしたの？》

「うん……気のせいかな」

一瞬、知っている魔力と気配を感じたように思ったのだ。

「……こんなところにいるわけないもんね」

そう結論付け、学生寮へと急ぐ。そこでは、ベリアローズと親友のエルヴァストが待っていた。

「遅いぞ」

「そう？ ……お兄様。なんでビミョーな顔してんの？」
「べ、別にっ」

ティアの兄であるベリアローズ・ヒュースリーは、絵本に出てくる王子様のように見目の良い青年だ。十八歳を目前とした今、その容姿は女子生徒達を惹きつけて止まない。

乳母達に何度も誘拐された事で、女性不信になっていたのだが、ティアの特訓により肉体的にも精神的にも鍛えられ、なんとか克服していた。

どこか張り詰めたような雰囲気も、ここ数年でとても柔らかくなっている。おかげで更に人気が出ているのだが、本人は自覚していなかった。

「はは。ベルは日が昇る前から、ティアの事をそわそわと待っていたから」
「っエル！」

エルと呼ばれた青年はエルヴァスト・フリーデル。このフリーデル王国の第二王子だ。

母がメイド上がりの側妃であるため、幼い頃は周囲から心ない言葉を投げつけられてきたが、それに負けずに明るく笑う少年だった。

ティアの指導によって戦い方を覚えたエルヴァストは、自信もつき、より魅力的な青年になっている。

「本当の事だろ？ その顔は寝不足だ」

エルヴァストの指摘に、ベリアローズは耳を赤くしながらそっぽを向いた。

「そんなに私に会いたかったの？ ギュッてするっ？」

「するかっ！」

相変わらず素直になれないベリアローズだ。

「あはは。それにしても、可愛いのを着てるな。良く似合っている」

「へへ、カル姐にもらったの。良いでしょ」

ティアはクルリと回ってローブを見せた。

「カル姐さんは、相変わらず趣味が良いな。この前いただいた服、気に入ってるんだ」

「あれ、エル兄様に良く似合ってたもん。カル姐ったら、自分で買った服より人にもらった服を優先させちゃうからさ。着てない服がたくさんあるから、またもらって言ってたよ」

「優しいあの方らしいな」

ベリアローズとエルヴァストも既にギルドカードを持ち、共にCランクの冒険者となっていた。長期休暇の度にクエストを受けていたのだが、その際、よくカルツォーネと一緒に来てくれたのだ。

おかげで二人とも、カルツォーネの事を『カル姐さん』と呼んで慕っていた。

「さあて、部屋に案内しよう……と思っただが、一応先生に挨拶しておいた方が良いでしょう」

「先生？ 寮の？」

「ああ。ここで待ち合わせて……あ、いらしたな」

「うん？」

エルヴァストの視線を追った先には、柔らかい笑みを浮かべた男性がいた。男にしては細身で、金茶色の長い髪を一つに結んでいる。

「綺麗な男の人だね。あれが先……っ？」

言葉が途中で切れてしまったのは、その人から感じられる魔力のせいだ。その歩き方にも、どこか既視感を覚える。

「やあ。君がヒュースリーの妹さんかな」

「はい……ティアラール・ヒュースリーと申します……」

「私はカグヤ。魔術学を担当している。それと、ここ第三学生寮の担当でもあるんだ。よろしくね」

「……カグヤ……先生？」

「さあ、中へ入って。部屋を確認しておいで」

これで挨拶は済んだと、ベリアローズとエルヴァストがティアアを促す。二人とも早く部屋を見せたいようだ。

ティアアはチラリと後ろを振り返り、兄達に聞こえないように小さく呟いた。

「サク姐さん……」

すると、そこに風が吹く。ティアアの声も、風の精霊がカグヤへ届けたのだ。

カグヤが目を見開いたので、ティアアはやはりと確信する。そしてイタズラが成功した時のような笑みを浮かべ、寮の中へと足を踏み入れた。

ティアアに用意された部屋は、一人部屋だそうだ。

「多くの生徒は、従者やメイドを連れてきているからな。複数人用の部屋が人気で、一人部屋が余っ

ているんだ」

廊下を歩いていて目につくのは、それぞれの部屋を忙しなく掃除したり、荷物を整理したりするメイド達。ティアアのように自分で部屋を確認しに来る新入生は、ほとんどいないようだ。

「ティアアには、ちょうど良いだろう。それと、この寮長はエルだ」

「本当っ？ なら脱け出し放題じゃん！」

「いや、ダメだからな？ それに、ベルが副寮長なんだから、何かあれば私と連帯責任だぞ？」

エルヴァストに釘を刺され、ベリアローズはティアアに言う。

「……脱け出すなら、分からないようにやってくれ」

「ラジャ」

ティアアを止める事はできないと充分理解しているのに、ベリアローズは黙認する構えだ。エルヴァストも、そうなるよなと苦笑するしかない。

「ほら、ここがティアアの部屋だ。この真上が私とベルの部屋だから、何かあれば相談に来るといい」

「うん。脱け出す時とかね」

「いや、まあ……そうだな……」

ティアアならば上手くやるだろうと信じる事に決めた二人だった。

「さあてと、フラム〜」

そう言っつて、ティアアは元気にドアを開ける。すると待つてましたとばかりにフラムが飛びついできた。

《キュウウウつ》

「わっ、ダメダメ。お兄様達、ドア閉めて」

ティアに続いてベリアローズとエルヴァストも部屋に入り、慌ててドアを閉めた。

「危なかったな」

「見られてないよな？」

《キュウ、キュウ……》

「よしよし。ごめんね、遅くなって」

《マティの寝るところ、どこ？》

フラムを撫でるティアの足下で、呑気なマティが部屋を見回していた。それに答えたのは、エルヴァストだ。

「マティの寝床は、あれだ。フワフワだぞ」

《わあい》

「あ、こらマティ。あんまり騒いじゃ……そうだ、遮音の結界を張っちゃえば良いね」

そう言っつてティアは、あつさり結界を張ってしまった。

「相変わらず、すごいな……」

「ティア。あまり大つびらに魔術を使うなよ？ 僕らも最初は加減が分からなくて、大変だったんだからな？」

「あ……ドンマイ」

「「違うだろ！」」

ティアの魔術の腕は、国の魔術師長さえ軽く卒倒させる。そして、剣技や戦闘センスも最高峰と言えた。更にすごいのは、高い知識力。その全てを、ベリアローズとエルヴァストは甘く見ていた。それらが本当に洒落にならないレベルなのだと理解したのは、ベリアローズが学園の編入試験を受けた時だ。学力テスト・実技テスト共に歴代最高得点を獲得した。学園始まって以来の天才だと言われたほどだ。

一番驚いたのは、ベリアローズ自身だった。ティアにスパルタ教育を施されたとはいえ、ここまでの結果を出してしまえるとは思っていなかったのだ。実力を大きく伸ばしたのはエルヴァストも同じで、新学期の実力テストで驚く事になった。

「まあ、おかげでベルが私の友人として周囲に認められたがな」

「ああ、おかげでクラスメイトとの距離感もちょうど良いんだがな……」

ちやほやされる事も、仲間外れにされる事もなかったのは幸いだと言える。しかし、教師達は大いに戸惑ったという。もはや自分達に教えられる事などあるのかと。

「いいか？ 周りのレベルを見極めるなんて、ティアには簡単だろう？ とにかく大人しく、目立たず、十歳らしく頼むぞ？」

「だな。ベルの時も大変だったからな。これ以上、教師陣を追い詰めないでやってくれ」

「むう……分かってるもん。ちゃんと『噂のヒューズリー伯爵令嬢』を演じてみせるよ？ イメージをしっかりと使い分けておいた方が、外で活動しやすいしね」

「待て。何する気だ？」

全く分かっていない様子のティアに、ベリアローズは焦る。これまでのティアを知っていれば、大人しい伯爵令嬢も演じられると分かるのだが、その言葉を聞いて不安になった。

伯爵令嬢ティアラル・ヒュースリーは、七歳の頃から聖女と呼ばれている。そのイメージを壊さぬよう、ティアは冒険者の時とイメージに差をつけている。それはいざという時、伯爵令嬢という肩書きを有効に使うためだった。

「何って、休みの日には冒険者ティアとして、クエスト受けるに決まってるじゃん。そうじゃないと体がなまっちゃやし、何より私が耐えられない！」

「……そういえば、毎日何かしらやっていたものな……。分かった。ストレスは溜めるな」

「そうだな。ティアがストレスを溜めたりしたらどうなるか……。だが、この学園街には貴重なものが多いんだ。活動する時には充分、気を付けてくれ」

「はあい。とりあえず、これからひと月くらいは街の外で活動するつもり。近くの盗賊さん達と遊ぶ予定だから、大丈夫だよ」

「……ほどほどにな……」

今から先が思いやられる兄達だった。

昼前。ベリアローズとエルヴァストは、入学式の準備があると行って部屋を出ていった。ちなみに入学式には、父フィスタークと母シアンも来る事になっている。

ティアは少ない荷物の整理を終え、フラムとマティに食事をさせると、静かに部屋で待機する。そして、その人がやってきた。

「どうぞ」

ノックの音に、ティアは返事をする。ゆっくりと開いたドアからスルリと入り込んできたのは、先ほどぶりのカグヤだった。

「こんにちは。カグヤ先生……うん、サク姐さん」

今は男性の姿をしているが、ティアが知るサクヤは、お茶目で魅惑的なお姉さんだった。声や仕草が自然すぎて、つい騙されてしまうが、本来の性別は男。もちろんティアや周りの友人達は、男だろうと女だろうと気にしない。だが、サクヤに誘惑される男性を見て気の毒に思ったのは、一度や二度ではなかった。

サクヤは獣人族なのだ。キツネの耳と、モコモコフサフサした九本の尻尾がある。姿を変える変化の魔術が得意で、人の国にいる時は耳と尻尾を隠していた。

獣人族の中でも、九尾と呼ばれる彼らの血筋は長生きだそう。かつて、ティアの周りにいた誰よりも年上だったサクヤ。まだ健在だろうとは思っていたが、こんなところで再会するとは思わなかった。

「つ……サティアちゃん……なのよね？ 髪や瞳は赤くないし、顔も少し違うけど……」

「うん。久しぶり。サク姐さん、元気だった？」

「……う……ええ……っ」

サクヤはしゃがみ込み、そのまま泣き崩れた。

どう見ても男の人だけれど、その魔力や気配から間違いのないと思ったのだ。恐らく、サクヤもそれらをティアから感じて、サティアだと確信したのだろう。

「サク姐さん……怒ってな——」

「怒ってるわよっ！ 何よっ……突然いなくなつて、ひよっこ戻ってくるなんてっ……そういう勝手なところ、マティにそっくり……」

乱暴に涙を拭^{ぬぐ}つて睨^{にら}みつけるサクヤに、ティアは苦笑する。サクヤがマティと呼ぶのは、マティアス・デイストレア——サティアの母だ。

サクヤとカルツォーネ、シエリスとマティアスは冒険者としてパーティを組んでいた。マティアスの結婚を機に解散したが、絆^{きずな}は消えなかった。

「ごめんなさい。でも、サク姐さんも同じだと思ふよ？ すぐフラフラつといなくなっちゃうじゃん」「う……確かに。……はっ、そんな事を言うなんて、さてはあの陰険^{いんけん}エルフに禁術とかで甦^{よみがえ}らされたのねっ？」

「いや……ありそうだけど、違うよ？」

ティアも強く否定はできない。世界樹がティアの転生を預言^{よげん}しなければ、シエリスは間違いなく研究していただろう。

「でも、本当にサティアちゃん？ 見た目は別人なのに記憶があるって事よね？ ……はっ、陰険^{いんけん}エルフが記憶をつ！」

「いや、だから違うって。転生したの。なんか、胡散臭^{うさんくさ}い天使に会つてね……その……昔の私って妙な呼び名があるでしょ？」

「あ、『断罪の女神』……え、女神になったの？」

「……」

女神と聞いてイラつとするのは、もう癖^{くせ}みたいなものだ。

「そっか……女神様ねえ……よかった……」

「うん？ 女神なんてやんないよ？ 私は私らしく生きて決めたんだから」

「そう……。でも、また会えてよかったわ。女神様じゃなくなつて、サティアちゃんはサティアちゃんだもの。今度こそ幸せになつて。あんな陰険^{いんけん}エルフになんか捕まっちゃダメよ？ 女の子は、いつだって運命の人を探す生き物なんだから」

そう言ったサクヤには、昔のようなお茶目な笑顔が戻っていた。

「それで？ サク姐さん^{ねえ}は、運命の人とやらに出会えたの？ 男の姿になつてるけど……それって、本来の姿？」

ティアは改めてサクヤの姿を見る。細く柔らかそうな明るい茶色の髪。金に近い薄茶色の瞳が覗^{のぞ}く、切れ長の目。優しい笑みを浮かべる口元。小さな顔と長い手足。ほどよく筋肉がついて均整の取れた体つき。その姿に違和感はない。

「うん。そうなんだ……格好悪いでしょ？」

「え、そう？ むしろ女子生徒にモテるんじゃない？」

「あれ？　そういえば……」

思い出すように、目を上の方へ向けるサクヤ。

「サク姐さん……もしかして無意識だったの？」

「仕方ないじゃない。里の中ではひよろいダメ男だったんだもんつ。里を出てからは、ずっと女で通っていたしい」

「……言葉遣いは、意識しないと戻っちゃうんだね……」

そう指摘すれば、サクヤは気まずそうに目をそらす。

「うっ……だ、大丈夫よ？　先生やつてる時に、この言葉遣いになった事はないもの」

「本当かなあ……」

「み、見てなさいっ！　今期の小学部の魔術学は私が担当だからね。目と耳をよく開いて待つてなさい！」

「期待してまあす」

「ふふふ、任せなさい」

おかしな方向へともつれ込みながらも、サクヤとの再会は無事叶い、今夜また話そうという事になった。

いよいよ入学式が始まった。暖かな陽射しが降り注ぐ中、屋外に用意された壇の上には、今期の小学部の担当教師達と、今期から加わった新任教師達が並んでいる。

新入生達は壇の方を向いて並び、その後ろに父兄がいた。父兄の左右には中学部と高学部の生徒達が並んでおり、それを囲むように中学部、高学部の教師達が立っている。

フェルマー学園は小・中・高それぞれが三つの学年に分かれていて、合計五百名ほどの生徒を抱えている。更に教師達と、警備、事務、管理を担当する大人達が百人近く働いていた。

学園の広さも相当なものだ。巨大な学園街の五分の一がフェルマー学園の敷地であり、その広さは一般的な街の半分ほどもある。

二階建ての校舎は横に長く、L字に折れ曲がっている。敷地内には五つの寮の他、図書館や大きな闘技場、全生徒が入れる広さのダンスホール、授業で使う備品の管理棟など、多くの施設が点在していた。

そして今、壇上の中央では、ティアのよく知る人物が祝辞と挨拶を述べている。

「今期より高学部の魔術学を担当する事になりました、ウルスヴァン・カナートと申します。新入生の皆さんとは直接的な関わりは少ないでしょうが、新たにこの学園に加わった者同士、共に歩んでいきましょう」

優しく微笑むウルスヴァンに、新入生達も笑みを浮かべる。彼の表情は清々しく、やる気に満ちていた。高学部の生徒達は、元魔術師長として有名なウルスヴァンから教えを受けられると知り、色めき立っているようだ。

新任教師の列に戻ったウルスヴァンは、穏やかな表情のままだった。しかし、進行役の教師が口にした言葉で、若干頬を強張らせる。

「次に、新入生代表、ティアラール・ヒュースリー」
「はい」

形式上のものでしかないが、入学の際には学力テストがある。最高得点を取った者が新入生代表となり、今年の代表はティアだった。

ティアはウルスヴァンに興味ありげな視線を送ったが、一瞬だったので誰も気付かなかった。ティアがその力を遺憾なく発揮した現場に居合わせたウルスヴァンは、ティアを少しばかり恐れているようなのだ。その怯えた顔を見て、あまり追い詰めないでおこうとティアは思った。

「聞きました？ 彼女、満点だったそうです」

「ええ。学園での目標を書いた作文など、まるで論文のようだったと評判です」

「あのヒュースリーの妹ですからね。頼もしい限りです」

そんな教師陣の囁き声を、風の精霊達がティアの耳に届ける。ティアが褒められていると思ったからだろう。

（うんうん。分かったよ）

壇上だんじょうに上ったティアに、みんなの視線が集中している。それが嬉しいらしく、精霊達はご機嫌だ。ティアは、直前まで挨拶文あいさつぶんを考えていた。ベリアローズから『十歳の子どもらしく』と釘を刺されたので、どうしてやるうかと考えていたのだ。

だが、先ほどのウルスヴァンの様子と教師達の期待する声で方針が決まった。この際だと思い、『聖女』と言われたとっておきの笑顔で挨拶あいさつを始める。

「この佳き日に、伝統あるフェルマー学園へ入学できた事を誇りに思います。お父様、お母様、そして多くの方々に見守られ、今日という日を迎えられた事に感謝すると共に、節度ある生活を心がけ、この学園の名に恥じぬ生徒となる事を誓います。私達は、この学園で多くの事を学び、国の礎いしとなるべく、高い志いそぎを持って己おのれを磨いていく所存です。先生方、諸先輩方。ご指導のほど、よろしくお願いいたします。新入生代表、ティアラール・ヒュースリー」

十歳の子どもとは思えない言葉の数々に、会場は静まり返る。その表情や口調から、誰かに用意されたものではなく、ティア自身の言葉だと察せられたからだ。

そんな驚きに満ちた空気を変えなるべく、会場に暖かな風が吹き抜ける。どこからやってきたのか、色とりどりの花びらが落ちてきた。それらがティアの周りで舞い踊り、美しい礼をしたティアの姿を際立たせる。これも全て、精霊達の仕業しわざだった。

（まあ、クソ天使の仕業しわざじゃなければいいか。……あ、蝶々ちやうた）

精霊達ならば許すと、ティアは笑みを深める。聖女と呼ばれる原因となった、七歳の『祝福の儀』。その時の出来事を思い出し、内心苦笑していた。

最初に拍手をしたのは、見かねたベリアローズとエルヴァストだった。それに、今にもクスクスと笑い出しそうになっているサクヤが続ぎ、やがて会場が大きな拍手で満たされる。

（これで、印象はバッチリ決まったかな）

『噂うわさのヒュースリー伯爵嬢』が始動した瞬間だった。

式が無事に終わり、新入生はそれぞれの教室へと案内される。父兄達は、他の部屋で今後の説明を受ける事になっていた。

ティアが教室へ向かう列に並んでいると、教師の一人が声をかけてきた。

「ビュースリーさん」

「はい」

もちろん、今も『伯爵令嬢バージョン』だ。優雅に、しなやかに動くのがコツである。ティアは他の生徒達から離れ、教師のもとへと向かう。

「教室での説明会が終わったら、各学年の代表生徒が集まる会議がありますので、第三会議室に来てもらいたいのですが……」

「承知いたしました。本館の……二階で合っていますか？」

「そうです。お願いしますね」

ティアは学園の見取り図を思い出していた。まさか、侵入経路を確認するためにそれを入手しているとは、誰も気付かないだろう。その教師も、きっとベリアローズから聞いていたのだろうと思いい、特に不審には感じなかったようだ。

離れていく教師と入れ替わりに近づいてきたのは、ウルスヴァンだった。周りにいた生徒達はそれぞれの教室へ向かい、すっかり人気がなくなっている。

「ごきげんよう。ウルスヴァン様。魔術師長、辞められたとか？」

ウルスヴァンは何やら三年前から、『平穏な隠居生活』を夢見るようになったらしい。原因はテ

ィアだ。ティアに喧嘩を売ったおバカな騎士達や国との間で板挟みになり、それが耐えきれないほどのストレスだったようだ。

「……はい。お久しぶりですね……ようやく後任が決まり、辞められたのですが……」

「言いたい事はハッキリと」

「っ、なぜあなたがいるんですっ？」

少々声が裏返っていた。態度を取り繕う余裕もないほど怯えているようだ。こうなるとティアはからかいたくなってしまう。

「本当にハッキリ言いましたね……十歳になったんですから、当然でしょう。そんな事言つて、実は私に会いたかったとか？」

「それはないです！」

間髪を容れず否定するウルスヴァン。ティアは悲しげに目を伏せながら胸を押さえる。そんな二人の会話が他人に聞かれないよう、風の精霊王である風王が音を遮断していた。

「そんな……傷付きました……この心を癒やすためには、ここから魔術で王城を吹っ飛ば……」

「ッやめてくださいっ!!」

ティアの実力と、過去の行いを知っているウルスヴァンには、冗談に聞こえないらしい。こんなところもストレスの原因の一つだったので、ウルスヴァンは泣きそうだ。

そこへ、ベリアローズとエルヴァストがやってきた。

「ティア。ウルをからかうのはやめてやってくれ。若く見えても歳だからな」

二人はティアとウルスヴァンの組み合わせをただで、状況を正しく理解したようだ。

「エル、歳の問題じゃないだろう。ティア、教室に行かなくていいのか？」

「もう行く。じゃあね、ウルさんっ」

ティアは無邪気な笑顔を三人だけに見せ、教室へと向かった。

「私の平穏な生活が……」

「ウル。あれだ。意識を変えろという神の啓示だ。第二の人生、ティアと楽しむ事を覚えた方がいい」「色々と捨てれば楽になりますよ……」

「うう……」

エルヴァストとベリアローズは頷き合うと、肩を落とすウルスヴァンの両側に立つ。そして、彼の背中を支えるように手を回し、そのまま職員室へと向かうのだった。

教室へ向かったティアは、その手前で立ち尽くす一人の女子生徒を見つけた。賑やかに談笑する生徒達の中に入れていないらしい。

「どうなさったの？ もうすぐ先生がいっしょにしゃるわよ？」

ティアは例のごとく、言葉遣いに気を付けて尋ねる。すると、その女子生徒が驚いて振り向いた。前髪を鼻の辺りまで伸ばしているため、暗い印象を受ける。だが、それよりもティアは、この女子生徒から不思議な魔力の波動を感じていた。

(もしかして……混じってる?)

人にはない強い波動。異種族と交流があるティアだからこそ気付いた違和感だった。だが、それをそのまま口にするのは憚られるので、その事には触れない。

「一緒に入りませんか？」

そう笑みを浮かべて言えば、目の前の女子生徒は唇を引き結んだ。そして、意を決したように口を開く。

「うるさい。お前もバカにするんだろう、偽善者めっ。そんな顔しても騙されなからな！」

「へ？」

その時、遠くから教師がやってくる気配を感じた。それに女子生徒も気付いたのだろう。再び唇を固く引き結び、何も言わずに教室へと入っていく。すると、こんな会話が聞こえてきた。

「なあ、あいつだろう？ 混ざり者って」

「そうそう。なんか目の横の辺りに、気持ち悪いウロコがあるんだって」

「やだあ。化け物じゃん」

「そんなのが同じクラスなの？ お父様に言ったら変えてもらえるかな？」

「私も言おう。やだよ、そんなのが近くにいてなんて」

それを聞いたティアは、思わずドアを乱暴に開けた。

「わっ」

「あ、ヒュースリーさんっ」

「うそ、同じクラス!？」

色めき立つクラスメイトとは目を合わせず、ツカツカと一番後ろの席へ向かう。そこで俯うつむいて縮こまっているのは、先ほどの女子生徒だった。

ティアが目の前に立つても顔を上げない彼女に、クラスメイト達は眉をひそめる。ティアはそれに構わず、いきなり彼女の髪をかき上げた。

「なっ、何するんだっ!!」

飛び上がるように立ち上がった彼女は、ティアの手を撥はねのけようとして、当たらなかつた事に驚く。

一瞬見えてしまったウロコのようなものに、息を呑むクラスメイト達。そんな彼らにティアは目を向けた。

彼らは貴族の子どものもので、異種族に否定的なところがある。人以外の種族に免疫めんえきがない事もあり、そこかしこで『いやだ』『気持ち悪い』などと口にしていた。中には悲鳴を上げそうになっている者もいる。

「意見がある人はお立ちなさい。後でこそそと陰口を叩くのではなく、今ここでおっしゃい。そのあなた方。先ほど、お父上に何を言うとおっしゃいましたか？」

「え？ あ……だ、だって……」

結局、大きな声では言えないのだ。目をそらすクラスメイト達を見て、ティアは密かに嘆息たんそくする。そして、陰口の対象となっていた女子生徒の方を振り返った。

「わたくしの名はティアラール・ヒュースリー。あなたのお名前は？ なんとおっしゃるの？」

「へ？ あ……アデル。アデル・マランド……」

「マランド……そう。この学園を創設したフェルマー・マランドの血筋ね。それで確信できたわ。自信を持ちなさい、アデル。あなたには、誇り高き竜人族の血が流れているのですよ。卑屈ひくつになどなつてはいけません。ここにいる誰よりも様々な可能性を秘めているのですから。その肌も、髪で隠す必要などありません。それは、強さの証あかしです」

「証……」

前髪から覗く瞳まなこに、強い輝きが宿るのが分かった。それに満足したティアは、笑みを深めて言う。「強くおなりなさい。力だけでなく、心も強くなければ、竜人族の血が泣きますよ」

その時、ちょうど教師が入ってきた。

「お、なんだ？ どうかしたのかな、ヒュースリー？」

そんな教師の言葉に、ティアはニコリと微笑む。

「大した事ではありません」

ティアが席につくと、教室内は不思議な緊張感で満たされた。それは説明会が終わるまで消える事がなかった。

説明会が終わり、生徒達は父兄ふけいと合流すべく教室を飛び出していく。

小学部の一年生は集団生活を学ぶために、一年間の寮生活が義務付けられている。週末の休息日と長期休暇の時だけは帰宅きせいが許されるが、子ども達にとっては明日の朝までが両親と過ごす最後の

ひと時と言えるのだ。

ティアは教師に指示された第三会議室へ行かなくてはならない。特に時間の指定はなかったため、校舎から人が引いてから動こうと、のんびり荷物をまとめていた。

「あの……」

遠慮がちに声をかけられ、ティアは後ろを振り向く。

「あら、アデル。ご両親がお待ちではないの？」

「う、うん。そうだけど、一応、お礼をと思って」

「お礼？」

髪の間から覗く瞳は、まっすぐにティアを捉えている。教室には、既にアデルとティアしかいなかった。先ほどまでの緊張感に耐えられなかったのか、他の教室よりも生徒の引きが早かったようだ。

「うん。言ってくれたから。これが『証』だつて。あたしがまだちっさい時に、ひいばあちゃんが言ったんだ。『これは、戦士の証だ』って」

アデルは小さな時から、こめかみのところにあるウロコのような皮膚が嫌で仕方がなかった。光を反射するそれは、人とは違うのだという『証』。だから、前髪を伸ばして隠していた。光に当たらないように、なるべく下を向いていたのだ。

「これを見て近づいてくる奴らは、『異種族の迫害に反対』とか言いながら、可哀想な人を見るような目を向けてきた。あいつらは偽善者だ。けど、あんたは違う。なんでだ？」

臆さずにまっすぐ見つめてくるティア。そんな人物にアデルは初めて出会った。教師達でさえ、見ないように目をそらしていたのだ。

アデルには不思議だった。ティアに見られても、全然気にならなかったのだ。こめかみに意識を向けられても、気まずく感じる事はない。

「なんでと言われても……多分、あなたが出会ってきた人達は、異種族と本当の意味で付き合った事がないんじゃないかしら？ 人と違う特徴つて、どうしても目が行ってしまうわ。けど、それがあって当たり前なものなら、そうはならないでしょう？」

「……目の色が違うとか？」

「そうね。エルフは耳が長く尖っているし、魔族は髪や目が独特の色をしている。獣人族は、耳や尻尾がある。でも、それがその種族にとって……その人にとって当たり前なものなら、そんなに気にならないわよね」

そう言いながらもティアは、苛立ちを感じていた。わざわざ『異種族の迫害に反対』と言いながら、アデルに近づく者がいるという事に。しかし、それを表情には出さず、わずかに苦笑する。

「けど……そうね……あなたの場合は、あなた自身が気にしすぎているのではないかしら。その髪も、見られたくないと思っっているから伸ばしてるんじゃないの？ あなた自身が『見られていないか』常に意識しているから、必要以上に気になるんだと思うわ」

「それは……そうかも……」

気になる場所を意識してしまうのは、見られる方も同じだとティアは思う。

「ふふっ。私の友人の中にはエルフも魔族も獣人族も、竜人族もいるのよ」

「え？ と、友達にいるのっ？」

「ええ。……ああ、そろそろ行かなくては。また明日お会いしましょう」

「うん……さようなら……」

「ふふ、さようなら」

戸惑うアデルの様子が可愛らしい。そう思いつつ、ティアは教室を後にした。

会議室に向かって廊下を歩きながら、入学式の時に見た教師の顔ぶれを思い出す。

「やっぱり、いなかった」

フェルマー学園の創立は、約六百年前。バトラー王国に創られた当時は、まだ小さな学園だった。

様々な種族や身分の子どもが通い、将来は冒険者として世界中を渡り歩く事を視野に入れた学園。

教師達も人族だけでなく、エルフ、魔族、ドワーフ、獣人族、竜人族と、それぞれの分野に特化した種族の者達で構成されていた。

それなのに今は、貴族の子どもが多くを占め、教師もサクヤ以外は全て人族だった。

「あの様子じゃあ、サク姐さんが獣人族だって事も知られてないんだろ……」

会議室のある本館。その一階に、創立者フェルマー・マランドの肖像画があった。その前に立つ

と、ティアは懐かしさを覚える。

（フェルマー先生……）

肖像画の中のフェルマーは、あの頃のままの姿をしていた。銀糸のような髪をまとめ上げ、夫

ある竜人族のマトウファル・マランドとお揃いのイヤリングをしている。ブルーダイヤのイヤリ

ングは、青く深い色合いの瞳にとても良く似合っていた。

フェルマーは、バトラー王家専属の教師の一人だった。週に三日、歴史学の担当だ。

しばらく肖像画を見つめていたティアは、感傷を振り払うようにゆっくりと目を離す。そして会

議室に着くまでに心を落ち着けようと、その場に留まりそうになる足を踏み出すのだった。

長机を四角く並べて配置した、会議用の大きな部屋。そこにはベリアローズとエルヴァスト、そ

してウルスヴァンもいた。

「ティア、席はここだ。意外と早かったな。友人はできたか？」

エルヴァストが楽しそうに話しかけてきた。

「残念。お友達になり損ねた子ならいたけどねえ」

小声で話すティアに、ベリアローズは眉を寄せた。

「ティア……もしかして、ずっとあの路線でいくつもりか？」

入学式の時のティアは、ベリアローズがクラスメイト達から散々聞かされた『聖女のような少女』

『深窓の伯爵令嬢』というイメージ通りだった。

この学園に来てから、何度否定したか知れない。だが、その美少女然とした容姿とも相まって、

本来のティアのイメージとはかけ離れた伯爵令嬢像が、完璧に出来上がっているのだ。

「なあに？ お兄様。こんな私はお嫌い？」

41 女神なんてお断りですっ。 5

40

「いや、というより、大っ変っ不安だ」
「は？」

妙に力を入れて切り返された事に、ティアは微笑みながらも目を細める。すると、ベリアローズは慌てて続けた。

「し、仕方ないだろうっ。自分の胸に手を当てて、よく思い出してみろっ。出会って間もない僕に、お前は一体何をしたっ？」

「うん……体力作りのためのトレーニングメニューをプレゼントしなかった？」

間違いない。根性無しの継嗣けいしでは困ると、スペシャルメニューを考えたはずだ。だが、どうやらベリアローズの認識は違うらしい。

「僕は覚えているぞっ。突然部屋のドアを蹴破けりやぶったティアに『弱っちいお兄様。鍛えてやるから表へ出るっ』なんて言われて無理やり連行された後、マティの餌扱えさいされて嘔みつかれたっ」

涙目になって当時は思い出すベリアローズ。

ティアは、それがどうしたのかと首を傾げる。

「え？ 何？ もしかして、私がクラスメイトを鍛えるところでも思ったの？ 確かに軟弱なバカ貴族が多そうだし、ここにいたら簡単に親に泣きつく事もできないもんね。この一年の間に色々と教育を……」

「するなよっ？」

「やめてくださいっ！」

静かに会話を聞いていたウルスヴァンも慌てて止める。

「いや、意外にありか？」

「エルっ」

「殿下っ！」

まさかのエルヴァストの同意に、ベリアローズ達は悲鳴を上げそうな勢いだ。そんな彼らを安心させるつもりでティアは言った。

「まあまあ、落ち着いて。今までみたいな力業ちからわざはやらないって。だって軟弱すぎて面白くないもん。うっかりプチっぷちと潰つぶしちゃいそうだし、自制するためにも、しばらくはこのイメージでいくよ」

それを聞いた三人は、心の底から納得した。『これは本音だ』と。

ティアは、今まで関わってきた多くの者達を変えた。完全に力業ちからわざで。それをやったところで、使物にならなくなるような根性無しはいなかったのだ。

ベリアローズは軟弱な方だったが、負けん気が強かった。騎士学校出の三人組——通称『三バカ』も、目標に向かう意志が強かったため、一度心が折れてもすぐに復活した。

マクレイト家の四兄妹やルクス、病弱だった母シアン。皆、変わろうという想いが強かったため、ティアに負けじとついてきた。

だが、ここにいるのは、まだまだ世界を知らないお子様達だ。ティアに正面から喧嘩けんかを売る勇氣もないだろう。ティアが今までのようにやれば、彼らは間違まちがいなく潰つぶれてしまう。

「やめてくださいね。相手は幼い子ども達なんです。叩たたいても立ち上がる、騎士達とは違うんです

よ？」

ウルスヴァンが懇願するように言う。女王様バージョンのティアが国の騎士達に行った教育的指導は、未だウルスヴァンの中で色褪せる事のない悪夢だった。

「やだなあ。だから今はやらないって。あ、でも……女王様と令嬢ってそんなに違わないよね……」
「ダメですよっ？ あんな事をしたら子ども達が死んでしまいますっ！」

真っ青になったウルスヴァンは、今夜、絶対にあの時の夢を見るだろう。完全にトラウマになっているようだ。

「ティア、あまりウルをいじめてくれるな。それと、気になったんだが『今は』なのか？」

エルヴァストは苦笑しながらも、徐々に楽しそうな笑み変わる。どうやら実の兄であるベリアローズよりも、ティアの事を分かっているようだ。

「ふふっ。だって段階を踏めば、もっと楽しめるでしょう？」

呆然としていたベリアローズが、はっとしてティアを問いただそうとする。

その時ドアが開き、多くの教師や生徒達がぞろぞろと入ってきた。

「お待ちせいました」

そうして、それぞれ二十名近い教師と生徒が席についたのだった。

「これより、今期最初の代表会を始めます」

開始の言葉を口にしたのは、学園長のダンフェール・マランドだ。

今でも学園長の職は、フェルマー・マランドの直系子孫が継いでいる。魔力が高い上に、竜人族の血が入っているため、彼らの寿命は長い。ダンフェールも見た目は五十代くらいに見えるが、実際は百歳近い高齢だった。

今回この場に集った教師は、小・中・高それぞれの学部をまとめる学部長三名。更に、各学年の学年主任が九名。普段はこの十二名と学園長だけが出席するのだが、今日は今期初の会議という事で、ウルスヴァンを含めた新任教師五名も同席している。

一方、生徒は男女関係なく、各学年二人ずつ。成績や素行を見て学園側が選任した模範生達だ。ベリアローズとエルヴァストがいるのも、高学部三年の代表だからである。新生の代表は、まだ人物的な評価ができないので、入試の成績をもとに上位二人が選出された。

今年の代表はティアと、新入生の中では最も位の高いドーバン侯爵家の三男——キルシュ・ドーバンだった。

「——では、今期はこのメンバーで代表会を行います」

進行役である高学部の学部長が生徒の名を一人一人読み上げ、今期の代表の顔ぶれを確認したところで、すぐに解散となった。代表の生徒は成績トップの模範生でなくてはならないので、まれに入れ替わりが発生する。ベリアローズとエルヴァストは、高学部から代表となった例外中の例外だ。最も替わりやすいのが小学部の一年と二年。二年生の代表二人も、今回初めて会議に参加したようだ。

左隣のキルシュが立ち上がったのを見て、ティアは笑顔で挨拶をする。クラスが違うので、これ

が初顔合わせだったのだ。

「ご挨拶が遅れました。三組のティアラール・ヒュースリーです。これからよろしくお願いしますね」
誰もが魅了される最高の笑顔。だが、キルシュ少年の反応は意外なものだった。

「ふん、僕に媚を売るな。気持ち悪い。これだから計算高い女は……。言っておくが、負けたとは思っていないからな。次は僕が一番だ」

それだけ言って、ティアと目を合わせる事もなく、キルシュは部屋を出ていった。

焦ったのはティアの後ろで聞いていたベリアローズとエルヴァスト、そしてウルスヴァンだ。他の教師達は眉をひそめながらも部屋を出ていき、生徒達も関わらないでおこうと、足早に去っていく。残されたのは、ティア達四人だけだった。

「ふ、ふふっ。なんだろう……。あのツンツンした感じ。とつても懐かしいわっ」

突然、楽しそうに笑い出したティアに、他の三人は息を呑む。

「くくくっ、これは是非とも調きよ……。じゃなかった、広い世界を教えてあげないと。貴族病は、早期治療が大切だもの。若いうちじゃなきゃね。末期になったら死ななきゃ治らなくなるものっ」
今まで大人しくしていた反動か、ティアは絶対調だった。これにはエルヴァストでさえ頬を引きつらせる。

「な、なんだろう……。悪魔が目覚めたような危機感を覚える」

笑顔で振り向いたティアは、嬉しそうに言った。

「今の見たっ？ 聞いたっ？ あの感じ、初めて会った時のお兄様みたいじゃないっ？ 精一杯、

虚勢を張ってる感じとか、女を馬鹿にする感じとか!! 何あの子っ、楽しすぎなんだけど!!」
テンションはマックスだ。新しいおもちゃを見つけた時のような輝きを放っている。

「……。ベル……。お前の時もこんな感じだったのか？ その……。よく耐えたな」

「ううっ……。ま、間違いない。この顔は、一番初めにマティをけしかけた時の顔だ……」

ティアの笑顔は、ベリアローズの心の傷をしつかりと抉ったらしい。見かねたエルヴァストが、よく頑張ったなと肩を叩いて励ます。その二人の後ろでは、ウルスヴァンが震えながら悲鳴を上げた。
「だ、誰が止めるんですっ？ ダメですよっ？ 侯爵家が消えてしまいますっ!!」

侯爵家が消えたら、国の一大事だ。ウルスヴァンは、その可能性に凍りつく。

「楽しい！ 楽しすぎるわ！ 学園なんて冒険者生活の合間の暇潰し程度にしか考えてなかったのに、こんなにも楽しい遊び場だったなんて！」

「待て待て。遊び場じゃないぞ。勉強する場所だ」

「やだなあ、エル兄様。私にとつては勉強だつて遊びのうち。余暇の楽しみでしかないんだもの。

あくまでメインは冒険者としての活動なのよ」

そこでティアは、急に表情を真剣なものに変えた。

「それにね、気に入らなかつたの、この学園。創立当初は、教師にも生徒にも色んな種族がいた。それなのに、いつの間にか人族至上主義の、バカ貴族の巣窟になつてるんだもの」

フェルマーの肖像画を見た時に、違和感を覚えた。今の学園の在り方と、かつてフェルマーが望んでいた世界との違い。それがティアには腹立たしかった。そして、先ほどのキルシュ少年の言葉

で火がついたのだ。

『国境のない学校を創りたい』

「それは？」

ティアの呟きに、エルヴァストが首を傾げる。

「フェルマー先生の言葉。この学園は種族の枠を越えて、それぞれの文化や技術を教え合い、助け合って、より良い関係と新しい世界を作りたいって願いから創られたの。でも、今日見た限り、そんな願いはどこにも感じられなかったわ」

人族の、それも貴族の子どもしかいないこの学園の現状が、ティアは残念で仕方がなかった。

「変えるよ」

ティアはニヤリと笑う。他の三人は、反射的にビクリと体を震わせた。

「変えてみせるわ。ここは、この国の未来を創る者達が集う場所。なら、この人達の意識を変えれば、国を変える事に繋がるわよね」

国の次代を担う貴族の子どもが集っているのだ。彼らを変えられれば、国の在り方も変わる。

「ふふふっ、待ってなさい。人族至上主義なんてもの、叩き潰してやるわ」

ここからが、新たな舞台の幕開けだ。遙か遠くで、あの似非天使が微笑んでいるのを感じる。

(せいぜい見ていなさい。女神じゃない。私がこの世界を変えてやるわ)

女神としての使命だからではなく、ティア自身が望む世界を実現させるのだ。

第二章 女神の新しい友人

アデル・マランドは一人、両親の待つ教室へ向かっていた。その間に思い出すのは、ティアの事だ。(あんな人もいるんだ……)

アデルにとって、ティアの言葉や態度は衝撃的だった。両親でさえ、アデルにどう接して良いのか分からず、腫れ物に触るような感じているのだ。

竜人族と結婚したフェルマーは、マランドの一族の中では異端だった。その直系子孫がこの学園を守ってきたのだが、フェルマーが理想としたものは、長い年月の中で変えられてしまっていた。

マランドの一族は、貴族として生きるために、異種族を否定しなくてはならなかった。だからこそ、一族の中に異種族の血が入っている事を忌まわしく思っていたのだ。

そんな中、生まれたのがアデルだった。両親は、彼女が竜人族の先祖返りである事を必死で隠そうとしてきた。マランド家に竜人族の血が入っている事は周知の事実だが、先祖返りだと知られれば、他の貴族達から爪弾きにされる。

だからアデルは、ずっと孤独だった。悪いのは自分だ。両親の怯えた態度も、世間の冷たい目も、全て自分のせい。そう思うしかなかったのだ。

教室に近づくと、多くの生徒と親達が連れ立って出てきた。